曲目の紹介

今回の演奏会では、当オーケストラの産みの親である故加藤愃三先生が得意とされていたドヴォルザークの交響曲から２曲をお贈りします。同じ曲を繰り返し演奏するのが得意（?）の当西高ＯＢオケとしては、第７番は初めて採り上げるものであり、狭いレパートリーを拡げるべく果敢にチャレンジしていますので、どうかお楽しみを！！

交響曲第７番ニ短調（作品70）

ン?　これはブラームスの曲かな?　というのが、私が初めてこの曲を聴いたときの第一印象でした。（まだ高校生の頃の話で、確かＧ．セル指揮クリーブランド管弦楽団の演奏だったと記憶しています。もちろんＬＰレコードが音源です。）今回初めてこの曲を耳にされる方がおられれば、多分私と同じ感想をお持ちになられることと思います。

ものの本によると、この曲はドヴォルザーク43歳の1884年、ロンドンのフィルハーモニック協会から名誉会員に選ばれたときに新作を委嘱され、その返礼の意味も兼ねて作曲されたものとされていますが、ブラームスからの影響を強く受けており、尊敬するブラームスの交響曲第３番に刺激されて作曲されただけに、冒頭で申し上げた第一印象にはそれなりに理由があるようです。全体の構成としては、第１、第２楽章を通して暗く渋味が漂い、まさに「ブラームス的」ですが、一転して第３、第４楽章はホップするような、スラブ舞曲的（ボヘミア舞曲的と言った方がよいのでしょうか）躍動感に溢れる独特なリズムが大きな魅力となっています。

ドヴォルザークが残した９つの交響曲のうち“第３番目に有名な曲”といっても、後に作曲された２曲に比べあまりにも演奏機会に恵まれていない気もしますが、完成度の極めて高い作品であり、一度聴いただけでも間違いなく耳に残る印象的な曲であると思います。

（本日の演奏も是非そうありたいものです……）

交響曲第９番ホ短調（作品95）

当西高ＯＢオケとしては、華々しい第１回演奏会（昭和60年）のメインを飾った曲であり、その後も第６回（平成２年）に、今回は３回目となります。先の第７番とは比較にならない程耳にする機会が多く、敢えて曲の解説を要すまでもないでしょう。

因みに、現役による演奏会では第４回（昭和48年）で採り上げておりますが、先般、当時の先輩・同僚と故加藤先生の御宅にお伺いした際、この年の演奏会の録音テープを聴くことができました。当時は弦が各１～２プルト位しかいない小規模な編成であり、演奏会当日も先輩諸氏にご協力を仰いで何とか体裁を整えていた時代で、現在の量的な繁栄と比べると隔世の感があります。演奏自体はかなり怪しい、危なっかしい個所はあるものの、高校生離れした（大袈裟かもしれませんが）仲々の説得力を感じる場面がちりばめられてもおります。もしも機会があれば是非聴いてみてください。歴代の西高オケが如何に“本番に強い”かがよく判りますから。（その後現役では、昭和57年の第13回と平成元年の第20回で演奏されています）

その日はあの当時の練習や演奏会当日の故加藤先生の指揮ぶりが懐かしく思い出され、本番での失敗談や意外な名（珍）演奏の場面に話の花を咲かせ、一気に現役時代に溯ったような気分に浸ってしまいました。(お互いの容貌の変化は別として……)

（西高26期　天田　孝　記）